

〈論文〉

釋迢空の戦時詠

—『天地に宣る』へのアプローチ—

中西 洋子

はじめに

釋迢空・折口信夫の歌集の内、第四歌集『天地に宣る』^{注1}（『折口信夫全集』第22巻・中央公論社、『釈迢空全歌集』角川ソフィア文庫）はその「追ひ書き」^{注2}に自ら戦争歌集と明言することく、全歌集の中で特異な光を放つ存在と言えるだろう。しかし、今日までなぜか取り上げられることが少なかったのではないかと思

う。^{注3}「追ひ書き」には、

去年十二月八日、宣戦のみことのりの降つたをりの感激、せめてまう十年若くて、うけたまはらなかつたことの、くちをしいほど、心をどりを覚ええた。けれども、その日直に、十首近く口につて作物が出来、その後も、日を隔て、幾首づ、何

だか撞きあげるもの、あるやうに、出来たのであつた。

と、昭和天皇による第二次世界大戦の宣戦布告に対する「感激」とともに、創作動機とその情熱的な作歌意欲の湧き上がるのを興奮気味に語っている。さらにまた、

私どもは恥^マしながら、今まで、憂国の士のやうな、美しい詞を吐くをりを逸して居た。其で居て、老いに近づいたこの年になつて、尚、国土や、軍団に対して、かくの如く愛と、念慮とを懸けて居たことを知ることが出来た。自身の表現によつて、自身教へられた訣である。

とも述べる。自ら作る歌の表現によつて、いかに自分が日本の国土や戦い、兵士らに対して深い愛情と念慮とを注いでいたかを教えられもし、確認することが出来たといふのである。あるいは次のようにも言う。「中には、たふとく命過ぎた人もあつて、人間としての悲

しみの、禁め難いものがある。此は、日本人相共に持つ悲しみであるから、誰も咎めてくれぬやうに。又、さう言ふ心を根柢から振り起こすやうに、輝きみちた顔や、詞を以て、私の前に、勝ちの消息を寄せてくれる人が多い。私は、たゞ歓喜と言ふより、もつと底深いおちついた、澄みきつた心を以て、其等の人及び消息に、次々に接して居る。だから、この感謝を多くの人々に捧げるに先つて、まづこれ等知りあひにおくりたい、と思ふ。」と。

戦死した知人や青年たち、生還して戦勝の消息を寄せてくれた人々に対する感謝を捧げるために、この歌集の出版を思い立ったと、歌集編纂の理由を述べている。戦死した人々を悲しむ心を励ますやうに、明るい消息や言葉を寄せてくれる人らに対して、「歓喜と言ふより、底深いおちついた、澄み切つた心」で接した、という箇所が印象深い。犠牲になつた人々への思いがこのやうな心境に至らせたのであろう。生還した人々への感謝と併せて、歌集編纂には深い鎮魂の思いがこめられていたと思われる。第二次世界大戦のさなか昭和十七年八月、著者五十五歳の年であつた。

このように「追ひ書き」に見られる文章には、戦争や戦時詠に対しての短くはあるがけて単純ではない内容が含まれていると考えられよう。事実、詠われている作品には一通りではない作者の心の動きがさまざまに反映され、展開されている。本稿では、前後の歌集『遠やまひこ』、『倭をぐな』などにも及びつつ、そうした作品にあらわれた諸相を読み取ることで、『天地に宣る』（以下本歌集）がどのような歌集かをあらためて考えてみようとするものである。

一

本歌集は次のような十二項目の見出し、及び小題と詞書き、題詞などから構成されている（『釈逍空全集』による）。期間は一九三七年（昭12）十二月から三年八月まで。作品数は百八十首を収録する。

- 1 天地に宣る（六、三十五首 詞書き、題詞）
- 2 捷報（二、二十一首 詞書き）
- 3 海表（十六首 題詞）
- 4 剎那（一、十首 詞書き）

- 5 戦時羈旅（一、四首）
 - 6 たゞ憑む（三首）
 - 7 戦ふ春（二、詞書き 十六首）
 - 8 草莽（二、十一首）
 - 9 黙祷す（詞書き、題詞 十八首）
 - 10 影あり（三、詞書き、題詞 二十三首）
 - 11 春王正月（一、詞書き 十三首）
 - 12 留まり守る（一、詞書き 十首）
- （ ）は小題の数

巻頭の「天地に宣る」は「昭和十六年十二月八日」の題詞を持つように、第二次世界大戦の宣戦布告の日から歌い始められるものの、体裁は編年体による組み方ではない。また、後半6「たゞ憑む」から巻末にかけては、日中戦争（一九三七・昭12）の戦時詠であり、必ずしも第二次世界大戦の戦時詠に限らない。そこで、初出のある12を除き、右の小題あるいは題詞、詞書きなどにより、その発表年月の判別できるものを書き出しておく。それ以外は（ ）に示した。

- 1 昭和十六年十二月八日、昭和十六年初旬、昭和十七年満州建国十周年、昭和十七年二月日本軍シンガポールを占領
- 2 昭和十六年春洋応召の時期か（「藤井春洋我が家にくことは十五年なり」）^{注4}
- 3 昭和十六年中華民国に旅行（年譜）^{注5}
- 5 昭和十七年二月か（年譜に信州旅行の記載）
- 6 昭和十三年一月（『遠やまひこ』「冬木の村」に重複）
- 7 昭和十三年一月、四月（『遠やまひこ』「苦しき海山」、「山の端」に重複）
- 8 昭和十三年七月（『遠やまひこ』「湘南鉄道を降りて」、「草莽」に重複）
- 9 昭和十二年十二月（題詞、『短歌研究』同年月より二首採録）
- 10 昭和十四年十月二十一日（同年一月『遠やまひこ』「子夜男歌」に重複）
- 11 昭和十四年一月、昭和十六年一月（『遠やまひこ』「春王正月」に重複）、
- 12 昭和十二年十二月（『短歌研究』「萱山」十二

首・昭和十二年十二月号）

この内4「刹那」には手がかりがないが、「機翼」六首の中の一首が『倭をぐな』の「春洋出づ」と重複し、発表年月は昭和十六年一月から同十八年四月としている。しかし、一首のみで4全体を第二次世界大戦の戦時詠と即断するのは無理があるかもしれない。こうしてみると発表年月に多少の前後があるものの、前半は第二次世界大戦、後半は日中戦争当時の戦時詠からなる、ほぼ逆年順に組まれた戦争歌集であったといえることができる。以上の点を踏まえて作品を読んでいくことにする。

二

国大いに興る時なり。停車場のとよみの中に、兵を見うしなふ

ただ一人ふたりと 肩を並べ行き、ひそかに別る、こと 欲るらむか

送られ来し兵は しづけき面あげて、挙手をぞしたる。はるけき その目

死なずあれと言ひにしかども、彼カ 若き一兵卒も、
よくた、かはむ
生きて我ワ還らざらむと うたひつつ、兵を送りて
家に戻りぬ

右は最後尾12「留まり守る」の五首。初出は12に触れた『短歌研究』掲載の「萱山」十二首中に見られるもので、日中戦争の始まった年である。一首目の上句は『遠やまひこ』では「た、かひは、国をゆすれり。」と改作された。原作では国家という意識が前面に表れ、戦いに向かう意欲を感じさせるが、改作では国が直面する非常事態をうかがわせながら不安感をも内包し、同時に下句ともひびき合った一首になっている。他の七首は分散して次のように収録されている。

萱山に 炭竈ひとつ残り居て、この宿主ヤトは 戦ひ
に死す (9「黙祷す」)
若き日を炭焼きくらし、山出でし昨日か 既に戦
ひて死す
ちりぢりに 人は帰りぬ。静まれるかどべの霜に

出でつつ あゆむ (『遠やまひこ』「萱山」)
いきどほろしく 人にむかひて言ふことをつ、し
み暮し 日ごろさびしき
春の日の ほどろにたけし草の原。踏み入りて
今は 声を立てたり
直土に 息絶えゆく隊長を再見マタざりきと言ふ 騎
手のふみ (同「孤独」)

なお、初出作品の内「春山に 煙の立てるところ見
ゆ。人あるらしと そこに行きけり」の一首は除かれ
ている。右の十一首には、出征する兵士を見送る折の、
兵士の個の心に寄り添い、「しづけき面」「はるけきそ
の目」と兵士の表情や動きから目を離すことのない迢
空の、祈りを込めた「死なずあれ」の心情が色濃く底
流している。同時期の12「たゞ憑む」にも「頬赤き一
兵卒を送り来て、発つまでは見ず。泣けてならねば」
と、若い一兵卒に寄せた抑えがたい心情を詠う。また、
炭焼き暮らしの男のあまりに早い戦死へ届くまなざし
も、そくそくとして胸に迫る。一つ残された炭窯がそ
のあわれを呼び起こす。妻子や親を残してあつけなく

命を落とす名もなき多くの人々に、逍空がいかに心を痛めていたかがよく知られよう。国を挙げての戦いの時に、けして相応しくはない、むしろ軟弱と見られそうなかうした作品に、血の通った人間的な面を見る思いがする。それが初出「萱山」十二首を占めていたのであった。

憤るわれのこころのすべしなく幽かに思ふ対支戦争
 (国崎望久太郎「木曾福島之歌」)

屍のすでに冷たき支那人の少年兵よ戦ひにけり
 大いなる力の前に声呑みて生きつぐ群れの一人なり我も
 (館山一子「雑詠」)

今は亡き兵もあらむを萬歳の声こそ残れニユース
 映画に (須田伊波穂「覗く銃眼」)
 さめ易き国民性を国情を憂ふる君よ病熱落ちずし
 て (鈴木欽二「銃後に」)

「萱山」掲載誌には、右のような戦いへの冷静なまなざし、敵国をも含めた兵士たちへそそぐ思いが散見される。国策に従った戦争を鼓舞する作品に混じって

多いとは言えないが、逍空に共通する発想、抒情質を同時期の歌人にも見いだせることを指摘しておきたい。

「留まり守る」に続く「苦しき海山」五首も、詞書きに「ことし、選集『新万葉集』を選ぶに苦しみ、〜」とあつて同時期の作。歌集巻末に位置するが、制作時期は歌集の中で最も早く、従つて戦時詠は二首目の「さ夜更けて眠るすなはち 目のさめて、おどろき思ふ。国は戦ふ」を含むこの五首から始まったのであった。わが国が信じがたい事態に直面したという現実を再確認しているのである。続いて、「死もまた、ばいろん脚に及ばざるか」と短い詞書きがあり、

た、かひに行きて 果てむと思へども、人には言はず。言はざらむとす
 我つひに このた、かひに行かざらむ。よき死にをすら せずやなりなむ

の二首を含む三首を載せる。ここで詠われるのは、逍空の戦いについて抱く思いである。「た、かひに行き

て果てむ」というひそかな願望、意志である。しかしそれは不可能なことゆえに、「よき死にをすら せずやなりなむ」と歎くのである。戦いに征かれぬ口惜しさ、銃後に甘んじざるをえない歎きは、迢空だけではなく同時期の歌人も抱いていた思いであった。例えば、前田夕暮は次のように詠う。

こんな男をここにねころがしておくのは惜しい、
擲弾を抱かせて上海におくれ

彼は出征つた。彼も彼も彼も。しかもここに寝て
いる男は出征かぬか

私を招集してくれ、私を私をと、ぐいぐいその「私」
を羽目板に押しつける

右は『短歌研究』（昭12・11）掲載の「時計が止まつてゐる」（二十六首）より。招集されず取り残された苛立ち、焦り、無念さを激しい言葉で投げつけた作品だ。口語使用が迫力をもつ。一方では、言葉が直接的であるためにそれ以上に深まらない、という印象を与えるかもしれない。内向的な迢空作との違いが興味

深い。また、迢空の銃後にある思いは、

力なきわが生業は、セイゲツ 族びと一兵卒に及くところ
なし

た、かへる人に向ひて 羞づらくは、命にかけて
せしことも なき

我いまだ老いかまねば、いさぎよく 若く過ぎ
行く人の 羨しさ

のように負の内面をさまざまに垣間見させる。自分の携わる研究、教育の仕事などは親族の一兵卒にも及ばず、戦う人らに向かつては、命を懸けて何かを成したことはないおのれを恥じ、それほど老いてはいない身には、若者の潔い戦死が羨しく思われる、という具合である。必要以上と思わせる引け目だ。こうした負の内面は、

逞しき心つのり来る この夜らや。みなごろしに
せむことをぞ 欲す

轟として 我が身 ことごと砲なりき。——聞こ

え澄む時、土煙見つ

一瞬や、我炸裂し、炎なり。はた 散りほへる飛

行機の——空

10 「影あり」に見るような、自分自身を戦場の現場にあつて戦う兵士に仮託して詠おうとする。一首目では敵を「みなごろしにせむ」とつゝの思い、二、三首目では砲弾そのものになつて炸裂し、敵機を木っ端微塵に打ち碎くなど、猛々しく生々しい感情がぶつけられる。映画や新聞などから得た想像であろう、砲弾の炸裂音が聞こえるようなりアルな戦場場面である。兵士に仮託することによつて実戦を共有しようとした、せめてもの思いに他ならない。一連八首中には、「朝の夢 さめ行くきはの静けさは、頼みがたしも。塹壕のなか」という作もあつて、激烈で勇猛なばかりではない兵士の抱く心細さ、個の心の壁にも及んでいる。負の内面の裏返しとみられよう。迢空の戦いは短歌表現による戦いであつた。

三

さて、「よき死」とはよく戦つて潔く死ぬという意味であつた。この「よき死」「よく戦う」は、迢空の戦いに対して抱く「かくあるべし」という理想、強い熱意に支えられていたようである。迢空にとつての戦いとは何か、戦いをどのようにとらえていたかを作品から探つてみたい。

た、かひは 三年となりぬ。国びとの こぞりて
思ふ心 よろしき (11 「春の思ひ」)

いさぎよく死にゆくことの さきはひを言に言は
ぬは、深く知りけむ

た、かひは すめら御祖の遠世より、よしと言ふ
時、ひたぶるにせし (10 「子夜男歌」)

よきいくさして還れをと言ひしこと、たは言の如
し、た、かふ人に

国のため よく死ににけり。もの、数ならざるも
のは さびしけれども (9)

戦へば 勝たざるべからず。我が知れるひとり
くも よく死に、けり

〔「遠やまひこ」では初句、二句、結句「戦ひに堪へゐる時に、よき死にをしつ」〕

雪のうへに 戦待ちてゐる人の、心むなしき時の
間を 思ふ (7)

青山に澄みて光れる日の光り。桜を見れば、国は
た、かふ (8)

まず、右に挙げた作品から読み取れる「戦い」とは、およそ次のようなことを意味しているだろう。——それは、国民が心を一つにしてたち向かうものであり、天皇の遠い祖先に繋がる時代から、戦うに最もよい時期が来た時は、ただひたすらに懸命に戦ってきたのである。また、戦う限りは必ず勝つべきである。「よき死」、「いさぎよき死」は国のためであり、国を繁栄させるもの、幸せをもたらすものである。兵士たちがわざわざ口にしないのは、その意味を充分理解しているからである、と。しかし、「よき死」、「よきいくさ(戦)」と言いながら、ものの数に入らない者にとってはそのしさを拭いがない。それにしても、今から戦おうとして待っている兵士の心の内が思いやられ、桜花を見て

も何をしていても、国が戦いのさなかにあることを忘れない日はない。——

こうした「戦い」へのとらえ方を理解するには、いわゆる十五年戦争と呼ばれる時代状況を考える必要があるだろう。その始まりは三一年九月(昭6)、関東軍参謀による柳条湖事件を契機とした満州事変であり、やがて日中戦争へと発展していく。これに先立つ二八年(昭3)に治安維持法が改正され、共產主義者やそれに関わる人々が多く検挙された。また、三二年(昭7)には特別高等警察部(特高)の設置、三七年(昭12)には中等・高等用の副読本として『国体の本義』が全国の教育機関に配布された。

さらに、日中戦争の激化する三八年(昭13)、国家総動員法が施行されるなど、日本は急速にファシズム化、右傾化をたどる時代であった。思想の取り締まりや社会運動の弾圧、政府の権限による人的、あるいは物質的資源などの、さまざまな統制がなされたのである。皇国史観が一般国民に浸透していったのもこの時期であった。^注 国のため天皇陛下のため、命を賭して戦い、潔く死ぬことが国民としての義務であり誇りとさ

れた。銃後にある人々も一丸となって協力し、戦勝のためにあらゆる困難に耐えしのんだのである。この状況はそのまま第二次世界大戦まで変わることはなかった。

もう一つ、逍空が国文学と併せて三矢重松を師と仰ぐ、国学の研究者であったことを忘れてはならない。国学は古事記・日本書紀・万葉集などの古典研究を対象として、日本固有の文化や精神を明らかにしようとする、近世に始まる学問であり、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤らに代表される。逍空によれば、国学とは

総ての国文学の中から自由なる道念をば引き出して来て、我々の清純なる民族生活を築き上げようとする欲望、それを学風としてゐるもの（略）固定しない、非常に自由に、日本の国文学及び国文学的な伝承の中から出て来る道念、今の言葉で言ふともらるせんすと申しますか、それを引き出して来て、我々の清純なる民族生活を築き上げて行く（略）

というものであった。その知識は「日本式の倫理観・

道徳観から出た情熱によつて運用されるもの」と言い、その目的には日本人の持つ信仰が問題の対象となり、道徳習慣によつて国学がきまる、と述べる。さらに、「かやうな世の中の一旦緩急あればといふ民族の働きの激しい秋は、どうすればよいか。一口で言ふと、信仰といふことに基を据えます。」とも。一九三七年（昭12）三月の講演筆記であった。「国学の末に生まれて、かひなしや——人と争ふすべを忘れぬ」「倭をぐな」熱闘に住む）、「国学のすゑに出で来て たゞむなし」くにの大事にあづからず居り」（『釈逍空全歌集』短歌拾遺）と、国学の伝統を受け継ぐ立場から、国の大事に役立てない無念さ、悔しさが詠われている。

以上に照らして再び右に挙げた作品を読むと、おおよそ合点がいく。これは7から11に配置されたもので、本歌集後半を占める日中戦争の戦時詠であった。この内9の「戦へば、勝たざるべからず。く」を除いては激しく心情を吐露したような作品はほとんど見当たらない。どちらかと言えば、兵士側に添って詠われている。また、日中戦争の戦時詠全体からしても、10の兵士に仮託した作品の他は、やはり兵士に寄せた作品が

多く占める傾向にある。前半(第二次世界大戦)では、1の「還らぬ海」四首や2の春洋応召に際しての七首などを除けば、この傾向ははるかに少なくなる。しかし、底流するところは変わらないのであろう。迢空の戦時詠の特質をこの点に見ることができるのである。

四

大君は 神といまして、神ながら思ほしなげくこと
との かしこさ

暁の霜にひゞきて、大みこゑ聞こえしことを 世
語りにせむ

人われも 今し苦しむ。大御祖かく悩みつ、神
は現れけれ

天つ日の照り正しきを 草莽に我ぞ歎きし。人の
知らねば

天地に力施すすべなきを 言出しことは、昔なり
けむ

た、かひの場に 哮べば、我が如き草莽人を 人
知りにけり

天地の神の叱責にあへる者 終全くありけるため

しを 聞かず

歌集名でもある1の巻頭詠七首。題詞に「昭和十六年十二月八日」とあり、第二次世界大戦宣戦の詔勅を聴いた日を記す。大君、神ながら、大みこゑ、大御祖、草莽(人)、叱責など古語を駆使した、荘重で力強く、緊張感を伴った巻頭詠に相応しいしらべの一連である。しかし、古語のみならず難解な内容でもある。

岡野弘彦はこれについて、「国学者らしい感動から生まれた歌である」としながら、この作品の心を今の時代に精緻に理解するには障碍になる条件があると言う。その第一は戦前、戦中の日本を覆っていた狭い神国思想と天皇を神と仰ぐ信仰が、いかに強く庶民の心を動かし、特に小学生や若者の内的な世界を一つの焦点に集中させていたか、それを体験して来なかった人にどんなに説明してもわかってもらえないこと。この作品は、そういう世相人心の燃えあがったまっ盛り of 時期に、一見それに呼応する如く見えて、実は大きく違った天皇観に立って歌われている。第二は、それが短歌の様式で表現されているからであるが、敗戦後の

五十年間（二〇〇〇年当時）に伝統定型詩としての短歌は、多くの現代人には短歌を見てすぐその一首の正しいしらべに従って読むことができなくなつたこと、を指摘する。^{註11} 当時のそういう世相人心の燃えあがつたまっ盛りの時期に、一見それに呼応する如く見えて、実は大きく違つた天皇観に立つて歌われている、と述べる点に注目したい。

またこれは戦後の民主主義教育を受けて育つた者への、戦前戦中世代の体験を理解しようとする努力不足を促す言葉でもあるに違いない。引き続き巻頭詠各首について繰り広げられる詳細な解説の内、最初の一首を紹介しておきたい。

この表現にこめられた折口の真意は、世の受け取り方とは大きく違つて、「人間である大君は、いま神のみこともちとしていらつしやつて、神ではないのに神さながらにして、お思いなげきなさることの、おそれ入つたことだ」というべき心である。人でありながら神の代役を演じなければならぬ天皇の重い苦しみを思っている。

初句、二句「大君は 神といまして」を「世の受け取り方」に従えば、天皇は即ち神であると読むだろう。一見すれば、神である天皇の宣戦布告を畏敬の念をもって受け入れ、積極的に参戦しようとする内容である。戦争に向かう気分、熱狂的に高まる世情においては都合のよい理解である。しかし、内容はいわゆる昭和一八年（三月か四月）のアラヒトガミ事件や戦後の「天皇非即神論」「女帝考」、戦前の「大嘗祭の本義」、「神道に表れた民族論理」（『折口信夫全集』第三巻）など一連の天皇論と呼応する。折口に従えば、天皇は神そのものではなく神のみこともち、人でありながら神の代役を演じる立場の謂であつた。従つて作品はこれらの論を先取りしたものと言える。歌と学問を両輪とする逍空の方法の一つであるが、この点が作品を読む難解さでもあり、細心の注意を払わなければならない点でもあるだろう。

この巻頭詠七首の解説の中で岡野は四首目に詠う「草莽」の、自分自身を人知れず草葉の陰にひそむ名もなき民としてとらえている語であることに注目する。この語はすでに昭和一二年、「我どちよ。草莽人

となり果て、慨たきときは、黙し居むとす」(「遠やまひこ」と用いられていた。また、五首目の「草莽人」と詠う兵士を言う時にも用いられていたのだが、本歌集中に多く見いだせる作品と併せて、「名もなき草莽のなげきとして、一途な現れ方で示されていて、」と述べている。先に本稿で示した兵士の心に寄り添い、兵士に仮託して戦う作品は、この部分とおのずから重なっていた。

ところで、戦後詠を含めた戦時詠について塚崎進は次のように述べる。

戦中戦後の歌群は、文学というよりも、民族の歌ごえである。この迢空歌を基準にして、後世の人々が、これらの時代を想定するときが来ることを信じている。(中略) 迢空文芸の本当の意味の出発は終戦の詔勅以後かも知れぬ。

ここでは、本歌集に限らず戦中戦後の作品に対して、「民族の歌ごえ」ととらえる点に注目したい。民族とは統後にある一般の庶民、戦場に戦う兵士達など、国

民総てを指すのであろう。塚崎は、「戦争中の迢空が生んだ短歌および詩というものは、日本人ひとりびとを対象に歌いながらも、(略)日本人全体、否、日本民族の心意気と情熱がうたいこめられていたのである」とも言う。本歌集はそうした立場から、あるいは心そのものになって詠う作歌姿勢、精神に貫かれていたと言える。それは個を超えた歌の営為でもあった。戦死した多くの兵士、その家族への鎮魂もここに繋がっていく。

戦ひはゆるすことなし。きりほふり、し、むらは

むと 仮言コトに言ふはや(4)

八潮路の奥処オウカも知らず戦へる伴トモの隼雄ハヤブサを 深く頼
めり(2)

わが心きびしくありけり。敵艦に身をうちあて、
戦はねども

おのづから 勇み来るなり。家の子をいくさにた
て、 ひとりねむれば

ひむがしの古き学びのふかき旨 蔑オミする奴輩ヤクゴロ 伐
ちてしやまむ

こゝろざし 伴の隼雄におとらめや。きびしく生
きむ年の、来向ふ

勝ち興奮に 声おのづから揚るなり。戦ひとりた
り。しんがぼうる

しんがぼうる落つ。夜はのにうすは 告げ了る。

身のとよめきを鎮めむとすも

ますら雄は 言揚よろし。仇びとの命をすらや

惜しと言ふなり

右は先の巻頭詠に続く作品から抄出した。前半を占める作品群（第二次世界大戦）は後半（日中戦争）に比して、戦勝に対する興奮や「伐ちてしやまむ」「しんがぼうる落つ」の表現など、概ね戦いへの積極性、戦いに向かう心の激しさが目立つ。逍空自身が言う、一つは国学に根ざした「情熱」によるものだったと理解したい。しかしもう一つは、何よりも後に養嗣子となり、硫黄島で戦死することになる藤井春洋の出征に因むのではないか、ということである。海原の孤島で戦う春洋を思えば、戦勝への願いは必至であり、歌の表現に力強さが加わるのは当然であった。

アプローチとしての本稿では、こうした触れられなかった問題をいくつか残した。稿を改めて考えたい。

〔注〕

1 初版は一九四二年（昭17・9月20日 日本評論社）

出版年順では『春のことぶれ』に次ぐ第三冊目に当たる。

2 『折口信夫全集』第二十五卷、『釈逍空全歌集』（折口

信夫著。岡野弘彦編・二〇一六・6月 株式会社KADOKAWA）では『天地に宣る』に続く。

3 岡野弘彦『折口信夫伝―その思想と学問―』（二〇

〇〇・9月10日 中央公論新社）第四章「概みの声としての短歌」に、本歌集巻頭の八首を挙げて「日

米両国に対する宣戦の詔勅を聴いて国学者らしい感動から生まれた歌であるが、当時の歌人達が作った、

空疎な用語と内容をともなわない戦争賛歌と同様に見すごされてきた傾向がある。」と述べている。本稿の後半参照。

4 詞書き「わが家に」から逆算すれば、春洋との同居は昭和三年十二月であるから「ことし」は昭和十

- 八年となり、本歌集出版年月日と矛盾する。
- 5 『折口信夫手帖』（折口信夫博士記念古代研究所 一九八七・10月）、『釈迢空全歌集』
- 6 『折口信夫手帖』
- 7 「死なずあれと」は、初出では四、五句目「一兵卒として 征きにけり」
- 8 『短歌研究』（昭12・12月号）所収、南龍夫「八月・九月」八首に次の作がみえる。
- 「三十年／無為に生きてきたと／つくづくおもへば／夢は戦乱の上海にとぶよ」「大陸の秋風に／傷口うづくと言つてきた友よ／たゞ空を仰いで／甲斐ない俺だ」
- 9 加藤陽子『満州事変から日中戦争へ』（岩波新書一〇四六、二〇〇七・6月20日）
- 古川隆久『昭和史』（ちくま新書一一八四、二〇一六・5月10日）
- 10 『折口信夫全集』第20巻「国文学と国文学と」、「国文学の幸福」
- 11 3に同じ
- 12 塚崎進『折口信夫とその人生』「力の文芸」（南雲堂

桜楓社 一九六三・11月）

※引用作品、同文献資料は漢字のみ当用漢字に改めた。